

芦別市立芦別小学校

実施日：平成23年11月15日（火）13:25～14:10

講師：三船 志代子氏（択捉島出身）

ただいま先生からご紹介のありました、三船志代子と申します。

今、先生からご紹介いただきましたとおり、北方四島の一番北にあります択捉島、その北にある「薬取村（しべとむら）」という小さな村で生まれました。薬取村の「薬取」とはアイヌ語で「大きな川のあるところ」という意味だそうです。

本日は私の生まれた薬取どんなところか、また人々どんな暮らしをしていたのか、戦争が終わってからロシア人がやってくるのですが、その時の様子、また強制送還により島から出ていかなければならなくなった時の様子のお話しをします。

まず始めに、私が生まれた薬取村がどんなところだったのかお話しいたします。

今、墓参とか自由訪問で薬取に行くことができます。薬取に行くには根室の港から船で行きます。着くまでには一中夜掛かり、距離にして145kmあるそうです。ロシアのハンターに守られながら上陸するのですが、村はすっかり自然に返っており、人は住んでおりませんが、今はヒグマがたくさん住んでいます。学校があったところには門やお寺の境内にあった松の木、それから神社の土台などが残っています。また、小高い丘の上にはお墓があったのですが、墓石が捨てられて1カ所に集められていました。これを見ると、昔ここに人が住んでいたのが分かります。

ここに「ばあちゃんのしべとむら」という絵本があります。この絵本は、今から10年前、子供達にもっと島の事を知ってもらいたく、コンクールで最優秀賞に選ばれた絵本です。作者は私、「三船志代子」。素敵な絵を書いていただいたのは娘の同級生の「はやしまきこさん」です。ここで読んでみますので、薬取はどんなところだったのか、皆さん想像しながら聞いてください。

（ここで絵本の朗読）

※絵本の内容は浦河町立菟伏中学校に掲載

（おわり）

薬取はどういうところか想像できました？

この絵本は私の幼かった頃の記憶、また段々薄れていく記憶を綴ったものです。この絵本が最優秀賞に選ばれてから、当時の様子に間違いがないか心配になりましたけど、先輩の方々に確認したところ薬取の事が良く書かれていると認めてもらいました。

それでは人々がどんな暮らしをしていたのかお話しさせていただきます。

まず魚はたくさん獲れていたそうです。世界の三大漁場と言われていましたから。

択捉島には1800年代、今から200年くらい前の幕府、今で言う政府の命令で「高田屋嘉兵衛（たかだやかへい）」や「近藤重蔵（こんどうじゅうぞう）」などが17箇所の漁場を開きました。その時、高田屋嘉兵衛は各漁場にお地蔵さんを安置し、豊漁をお願いしたそうです。薬取もそのうちの一つです。この絵本に出て

きた時のお地蔵さんは、その時のお地蔵さんです。

村の多くの人はそこで働き、魚の獲れる時期には多くの出稼ぎの人が来ました。出稼ぎに来た多くの人々は、3・11東日本大震災で被害のありました、東北地方からの出身者が多かったそうです。冬には出稼ぎの方々それぞれ地元に戻ります。冬になれば村は静かになり寂しくなりますが、村では青年団から子どもまで、村の主な人で「歌舞伎」を上演したそうです。会場は公会堂、今でいう公民館に、村人はたくさんのご馳走を持ち込んだそうです。村長さんはいつも主役、私の父は女方を務めていました。その時は写真がこちらです。この写真は父の島から持ってきた古いアルバムの中にありました。薬取村は小さい村ですが、豊かな暮らしが出来ていました。

幼かった私が、島で楽しかったことといえば、川や海で遊んだ事です。綺麗な砂浜が続く浅い海には小さいカレイの子どもがたくさんいます。砂の中に体をかくして目だけ出しているのですぐ分かります。小さい子どもたちはそれを足で踏んづけたり、手ぬぐいを広げてすくったりして遊びます。でもカレイの子どもは素早く、砂を撒き散らし逃げ回り、私たち子どもには捕まえることはできませんでした。絵本にも書きましたが、岩場に行くと花咲ガニがいっぱいいて、これを捕まえる事がとっても楽しかったです。

村の暮らしは、今から65年前の話ですが、電気、水道はありません。明かりは石油ランプを使っていました。

飲み水は井戸もありましたが、街の中央に山水が溜まる大きな水槽があり、それぞれの家庭には樽など置いてあり、街の水槽から天秤棒を担いて運びました。とても冷たくおいし水でした。

暖房は薪ストーブです。ストーブの上にはいつも鉄瓶があり、いつもお湯が沸いており、お茶などはすぐに飲む事ができました。

電話は郵便局や役場に何個かありました。街にはお店は一軒ありました。このお店は、現在のスーパーマーケットみたい存在で、何でも売ってました。お米、味噌、醤油、お酒、衣料品、薬、その他日用雑貨なら何でも売っていた。通信販売も行われており、私の父は東京銀座の三越から買ったと話しておりました。

畑では様々な野菜も採れました。イモ、ニンジン、ダイコン、ゴボウ、キャベツその他キュウリ、ナス。豆類も採れたそうです。山菜も春になると採れ、ギョウジャ、ニンニク、ウド、フキ、ユリの根などが採れました。

冬になると海が荒れて、流氷が来るため、船の往来はなくなります。冬になる前には必要な生活物資はまとめ買いをしたそうです。

昭和20年8月15日の終戦後、のどかで平和だった村にロシア兵が突然やって来ました。私たちの住んでいる薬取村にやって来たのは、9月の末と聞いています。その時私は小学1年生で詳しいことは分からないのですが、村人たちは「ロシア人が来ると大変な事になるぞ」と言い、とても心配そうでした。

私の家の前は村役場があり、人々の出入りはよく分かりました。親からは「窓を開けて外を見てはいけな」と言われましたが、夕方、外が騒がしかったので、窓から覗いて見ました。そのとき、ロシアの兵隊たちが踊っていました。一人がアコーディオンを弾き楽しそうに踊っていました。とても陽気な人々だという印象を受けました。

間もなくロシア兵の家族も島へやって来ましたが、住む家がなく、駅逦(えきてい)や旅館をロシア兵に没収され、ロシア人家庭はそこに住んでいました。そこでは足らず、私たち日本人の家にも家を半分にして、ロシア人も一緒に住んでいました。時々、ロシアの女性が家に遊びに来ました。パンの焼き方など母が教わり、仲良く暮らしていました。

ロシア人がやって来てからは、学校も半分にして使っていました。そのため学芸会などは学校では出来ず、お寺の本堂に舞台を造り、歌や踊りや劇などをやりました。

ロシア兵が島に来てから2年後の昭和22年の8月に引き揚げの命令がありました。

そのとき、学校は夏休みで私たち子どもたちは家に居たので、友達にお別れも言えませんでした。

引き揚げるとき、私は小学3年生の8歳でした。引き揚げの通達が来てから、慌ただしく荷物をまとめ、引き揚げる者は、皆砂浜に集められました。村人の半分が集められ、残った者は更に1年間、ロシア人と一緒に暮らし、翌年の昭和23年に引き揚げてきました。

引き揚げた時の私の家族は父、母、4人の子どもと、他に夫を亡くした叔母さんの家族8人も一緒に引き揚げたので、30代の父は大変だったと思います。引き揚げ船に乗る時は、薬取村が一番北にあるので最初に乗ることができました。海は遠浅のため大きな船は沖に停泊し、舢舨という小船で乗り降りしなければなりません。この舢舨に荷物と一緒に乗せられた私は、初めて船に乗り、嬉しくなり、船底を見たりしてはしゃいでしまいましたが、大人たちは不安な顔をしていました。

引き揚げ船はロシアの貨物船で、人を乗せる船ではなく荷物を運ぶ船です。船底から甲板まで人でいっぱい、乗せられたロシアの貨物船は不潔で気持ちが悪かったです。ノミ、シラミ、南京虫などの虫もたくさんいて、またトイレ、飲み水、食べ物なども不潔ものでした。

私たちの船は根室に引き揚げるのではなく、樺太の真岡（まおか）という港に上陸させられました。宿舎となる女学校まで永遠歩かされました。当時小学3年生だった私は大きな荷物を背中に抱え大変辛いものでした。

宿舎となった学校は、9月上旬でもとても寒い日があり寝むれない夜も度々ありました。

トイレは外の遠いところにあり、また途中にはロシア兵が銃を持ち監視しているので、まだ小さかった私はとても怖かった記憶があります。

引き揚げた時、荷物も制限され、一人30kgまでと聞いています。みんな家の中で一番大事なものをそれぞれ持ち、私は家で一番大事な仏様と子どもが着る下着を持ちました。他の家の人には着物でも綺麗な振り袖のようなものを持ってきましたが、これらの物は移動の時全て盗まれてしまいました。荷造りの仕方では何が入っているのか、大事な物が入っているのか分かったみたいです。

私の父はアルバム4冊と蓄音機を持ちました。途中、荷物検査があるのですが、この検査で引っかかると全部没収されます。この時、父が持って来たアルバムと蓄音機が日本に帰ってきてから活躍することとなります。今回のこの写真も、父が島から持って来たアルバムから提供されています。蓄音機の方も引き揚げてきてから娯楽のない時代で、村のお祭りや演芸会や村の保育所などで長年使われてきました。

ようやく9月中旬頃、日本の引き揚げ船で函館の港に来ました。ところが、当時函館では赤痢やはしかなどの伝染病が流行っており、上陸できませんでした。体全体に真っ白なDDTという、粉の殺虫剤をかけられ、船上で一週間くらい過ごし、その後上陸しましたが、みんな栄養失調のような状態で多くの人々が亡くなりました。入院しても食べ物や良い薬がなく、亡くなる人が大勢いました。私の裏に住んでいた村長さんの娘二人も亡くなりました。そのお兄さんが妹の亡骸を背負って火葬場に行き、火葬してもらったそうです。お葬式なども出来るような状況ではありませんでした。村長さんは村人の半分以上を島に残してきたので、次の年島民全員が無事に引き揚げてくるのを確認するため、函館を動かさずじまいでした。

一緒に引き揚げて来た人は、それぞれ親戚などの身内を頼って、全国に旅立っていきました。そのとき一緒に来た叔母さん家族の8人は、身内が居なかったため、国が決めた場所に旅立っていきました。私たちは叔母さん一家と別れ、根室管内の別海町に行きました。戦後であり食糧事情は悪く、引き揚げ者だけでなくみんな貧しかった時代で、お金があっても買えない、手に入らない時代でした。

今の薬取の様子ですが、現在私のふるさと「薬取」には人は住んでいません。択捉島でも中心地の「紗那」というところには、ロシア人は大勢住んでいます。

初めてお墓参りで訪れた20年前は、写真撮影も制限されました。また、警備隊も銃を持って着いてくるの

で怖かったです。

今はお墓の草刈りをしてくれたり、カニを茹でてご馳走してくれたりもします。現在の島民の服装も今は綺麗になり、お洒落になってきました。国後島でもそうでした。今の島民は日本の中古車に乗っています。乗用車だけでなくトラックなども島でたくさん走っています。また、お店には品物はたくさん揃っており、幼稚園、学校、病院などは新しく建てられています。工場や港の建設、道路の拡幅、舗装などインフラ整備も進んでいます。今までは舗装道路もなく砂利道ばかりで、町中はほこりまみれだったのですが、今は舗装工事も少しずつ始まっています。また、今住んでいるロシア人は日本人ともしっかり仲良くしたと話していました。

